

## 第34回泌尿器科漢方研究会学術集会

会長： 笈善行(香川大学医学部泌尿器科学教室)

会期： 2017/6/17 ~

会場： コクヨホール(東京都)

## 一般講演 I

座長： 原三信病院 武井 実根雄

## 4. 頻尿に対し五行説の概念から漢方治療をした一例

東邦大学 泌尿器科学講座

○鈴木 九里、伊藤 友梨香、清水 知、中島 陽太  
 松井 幸英、大川 瑞穂、田村 公嗣、田井 俊宏  
 山辺 史人、三井 要造、小林 秀行、永尾 光一  
 中島 耕一

腹の底まで沁みとおるを「五臓六腑にしみわたる」というが、この「五臓」とは心、肝、肺、脾、腎のことをさす。東洋医学での五臓の概念は近代医学で用いられる概念と異なっている。この五臓が相生相克関係を形成し、バランスよく働いているのが健康な状態で、このうち一つでもバランスを崩すと必ず他にも影響を及ぼす。

今回、昼夜を問わない頻尿症の患者に、五行説の概念から脾を整えたところ、症状が改善した症例を経験した。症例は76歳男性。既往歴には63歳時に胃痛のため胃部分切除を受けているほか、脊柱管狭窄を合併していた。3年前に尿閉にてバルーンカテーテル留置後、 $\alpha$ 遮断薬にて尿閉は改善していた。しかし、その後から膀胱違和感、頻尿(昼間1時間毎、夜間2時間毎)を認め、尿中からはMRSAが検出されていた。前立腺は超音波上27.9g、残尿0mL、膀胱鏡上も異常は認めなかった。抗コリン剤を数種類使用したが効果なく経過観察となっていた。寒暖にかかわらず頻尿を認めた。腰痛のため仰臥位なれず腹証はとれなかった。舌は黄色苔で胃切除後もあり、症状からは牛車腎気丸処方を検討したが地黄による胃への負担もあり適当ではないと考えた。胃切除もあり、「脾」の働きが低下していると考え六君子湯を処方した。内服開始2週間に昼間2時間、夜間3時間ごとへと軽快、6週間目には昼間は3時間毎、夜間1、2回と改善。寒冷で夜間3回へ増えたため、牛車腎気丸を併用し昼間2時間毎、夜間は2回となった。

五行説における「脾」の働きは、①食物を消化吸收し、水穀の気を生成し、②血の流通を滑らかにし血管からの漏出を防ぎ、③筋肉の形成と維持を行うことである。西洋医学的概念の脾臓とは違い、胃に近い考え方である。脾が異常を示唆する症候として①食欲不振、消化不良、悪心、胃もたれ、腹部膨満等 ②皮下出血 ③脱力感、四肢の倦怠感、筋委縮 ④考え込む、抑うつなどがある。「腎」は①成長、発育、生殖能を司り、②骨・歯牙を形成、維持し、③泌尿機能を司り、水分代謝を調整し、④呼吸能を維持し、⑤思考力、判断力、集中力を維持する、と西洋医学的な腎臓と若干近い。その異常は①性欲低下、不妊、②骨の退行性変化、腰痛、歯牙脱落、③浮腫、夜間尿、排尿障害、目や皮膚の乾燥、④息切れ、⑤健忘、根気がない、恐れ、驚き、⑥白内障、耳なり等があげられる。脾は腎に対しては抑制的に働くため、脾の不調は排尿状態にも影響を与えると考えられ、今回、脾の処方の一つである六君子湯により、脾が整ったことで昼夜間頻尿が改善したと考えられる。

## 参考文献

寺澤捷年：五臓の概念、症例から学ぶ和漢診療学 第二版 P 7-10

花輪壽彦：漢方診療のレッスン 増補版 P 338-340

寺澤捷年、喜多敏明：EBM漢方 xi-xiii